

第七十四回

瀬戸市文芸発表会

詩部門 特選・入選作品

詩

【若山 紀子 先生選】
『一般の部 特選』

海
峽

東京都渋谷区

芦田 晋作

好きだったものを
手放したのは
飛行機の墜落を
さけるためである

好きだつたものを
取りもどしているのは
海峡を
横断できたからである

バランスと
速度が

最初で最後の
飛行だから
あのころは

荷物が重いと
墜落すると思つて
重さのないものまで
次々と
滑走路に置いてきた
離陸してからも
窓から投げ捨てた
それなのに
今それらを
取り戻そうとしているのは
もう海に落ちることへの
恐れが消えたからである
好きだつたものを載せて
飛行機は
墜落しないと
海峡で
学んだからである

明石まで

愛知県一宮市

大江 豊

きみは
遅れてやつて来て

わたしは
早目に着いているので

大時計のところで

どれくらい待つたことだろう

きみは
小説を書いていて

わたしは
詩を書いていた

なぜ
合わせなかつたのだろう

京阪神間を百三十キロで突っ走った
アメリカでもフランスでもない
高卒で働き 時刻表と
文庫本が青春だった
わたしたち

きみは
早目に着いて

わたしは
遅れてやつて来て

ちようど 地球儀で

いつまでも苦手だつた
時差の計算式を思い出す

日本標準時 明石市

東経百三十五度線上に立つ

もう 誰も彼もが

秒針通りだ

そこが 二人乗りの
いいところなのだろう
乗せたり乗せられたりしながら
きょう夏の一日を過ごす

それだけの約束で

名古屋から明石の天文科学館まで
顔を見合せながら在来線の車窓から
関ヶ原や伊吹山から畿内へ

『一般の部 入選』

ゆつちやん

静岡県浜松市

尾内 甲太郎

歯のぐらぐらする
六歳児は青虫を

「ゆつくりだからゆつちやん」

と名づけてしまつた
蝶になつたら空へかえすんだよ
と言うと

「なんで」

つばさあるものは空へかえしてやるものさ

「いやだ」

透明な虫ケースのなか

ゆつちやんと

すぐに枝になるれもんの枝葉

奥の乳歯はぐらぐら

三日月のころ

ゆつちやんは蛹になり

満月の朝
ゆつちやんの蛹は割れた
ゆつちやんのだらりと垂れた翅は
もはや自分のものではない
と六歳児は知つた
こわくなつたのだろう

六歳児は翅をつかみ
ゆつちやんを4階のベランダから
空へ放つた
六歳児は空へ
背を向けた
もうふりかえらない

思い出の定期便

千葉県船橋市

砂原 湊

今日のお月さまから
あたたかい豚汁をもらいました

明日の朝焼けから
妬ましい眼気をもらいました
(おかあさんの怒りは再配達で)

今週の水曜日から
いつもの電車の空席をもらいました

一週間後の三連休から
思いがけぬ怠惰をもらいました
(洗濯物は干したからね?)

来月の期末試験から
りっぱな赤点をもらいました

再来月の体育館裏から
ひとつひらの勇気をもらいました
(まずは、ありがとう)

新しい年から
一歳、もらいました

新しい季節から
おじいちゃんの手紙をもらいました
(もちろん、メインの果物も欠かさず)

新しい時代から
家族をもらいました

新しい時代から
新しい自分をもらいました

思い出は定期便のように
時間と共にめぐっていく

さも当たり前のよう
それがいつ終わるかもしらずに

だからこそぼくは「今」に
ぼくの思い出をあげましょ
(あ、お釣りは結構ですよ)

いつもやの思い出から
新しい思い出をもらいました

半透明

名古屋市千種区

福山 ちあり

いないようで いる
いるのに はつきり見えない
透けて見える先に
何もないふりをする

名もない 仕事は 終わりもない
笑つて 笑つて
そうやつて、地球の反対側へ
湯気の立つた 味噌スープを持つて行く

不確かな存在
それでも 確かに
それが愛というならば
地球の反対側へ行つたまま
私は半透明

いいようで いて
いるようで いない存在
エプロンを取つたら

もう
愛なんていらないふりは しない

ふと見上げると
青空の月
私と同じ
半透明

『小中学生の部 特選』

帰り道

雲の隙間から見える光
家への帰り道
私は一人路地を歩く
建物に光が当たる
黒い海が狭い道と私を飲み込む
薄暗い路地に響く
カラスたちの嘲笑うような声
無視して通り過ぎる

幡山中学校一年

上浦 麻央

猫は私を見つめていた
にらんでいるようで
寂しげにも見える顔で
私はそこに自分を重ねて
深く息を吐いた

見上げると
暖かい光に照らされた雲の波を
悠悠と鳥の群れが泳いでいる
光の差す路地

不意に不安になつて
視線を落とす
青い目の黒猫と目が合う

あたり一面を照らす光
家への帰り道
私は一人路地を抜ける

青 空

雲は 海の上を歩いている
海は 雲が歩くたびに
ザアザアと波を立てている
波は 陸に上がり
また海に帰つていく

大きくて真っ白い 夏の入道雲
それにおおいかぶさる 青い空
まるで
ブルーハワイのかき氷のようだ
そんなことを考えながら
私は 小さい青空を食べた

幡山中学校一年

高橋 千紗

『小中学生の部 入選』

世界

幡山中学校一年

浅野 智恵

私達は飛ぶ。

明日への希望、新しい出会いを
求めて。

自由に飛ぶんだ。

今日も。

私達は何にもとらわれない。

世界はかわりゆく物語。

空は世界、世界は空。

毎日世界は面白い。

鳥が飛んでいる。

今日も自由に。

綺麗な直線を描くかのように。

鳥から見たこの地上はどう見えているのだろう。

なぜこの世界は美しいのだろう。

それはそれぞれの生物が一生懸命生きているからだ。

私達も一生懸命生きる。

どうかどうかいつまでもこの世界は美しいままであって
ほしい。

星 空

幡山中学校一年

黒い空に小さく光る星
まるでふりかけのようだ
一度でもいいから食べてみたい
うごいたりはしない
だからずつとそこにいる
光る星をずっとみていたくなる

大屋 雄大

獲物と捕食者

幡山中学校一年

太陽は海から逃げている
太陽が走って逃げている
太陽は 太陽は 獲物。
海は太陽を待ち望んでいる
海はうなつて いる
海は 捕食者。

尾崎 璃音

帰り道

幡山中学校一年

金田 くらら

落日はやい霜月の
遊び疲れて
見上げた空
雲はなく
ただ一つ浮かぶ
三日月が

いつの間にか現れた
冬の空に星たちが
帰るための道しるべ
おもわず止り見てしまう
きらり輝く6時の空

真ん中光る一番星
周りを光る星くずたち
まるでどこかの大家族
いつもと違う空を見て
いつもの道歩いてく

充電コード

幡山中学校一年 鈴木 音桜

ときどき 差し込む 口の中に
入れてしまうと 周りが真っ暗
時は はるかに 過ぎていく

ときどき 差し込む 口の中に
その時は ついに 終わる
だが 自分の足は 差されたままで

ずっと 差されたままの 自分
使われなくなるまで このままなのだろうか
この眺めは 何回目なのだろうか

しごと

幡山中学校一年

鈴木 唯真

飛行機雲

幡山中学校一年

西山 結唯

ぼくには休みがない
二十四時間働き続ける
チクタク チクタク
一定のリズムで進み続ける
まるで終わりの無い持久走みたい。

ぼくの仕事は毎日午前0時に始まる
全ての針が十二に揃つたらスタート
一日かけて千四百四十回も走るんだ
一分、一秒の遅れも許されない。

ぼくは働き続ける
疲れ切つて動けなくなるまで
正しい時間を指示す
それがぼくの しごと

飛行機が
雲を出しながら
飛んでいく

細長い雲が
出てくる
飛行機から
少しづつ
そして
だんだんと消えてゆく

その雲は
まるで轍のようだ

進んでく飛行機
流れしていく雲
遅いのに遅い
遅いのにはやい

僕はまだ見つかっていない

幡山中学校一年

水野 醒良

空の祭り

幡山中学校一年

森 雅樹

僕はまだ見つかっていない

花火が
空で
舞い上がる。

何年も何年も地中奥深くで

花火が
空で
舞い上がる。

誰にも見つかることなく眠っている

花火は
もう飛んでいる。

一人寂しく眠っている

花火は
もう飛んでいる。

静かで暗い 何もないところで

花火は
もう飛んでいる。

忘れもしない あの時
みんながいつも通り過ごしていた

花火は
もう飛んでいる。

あの時 あの瞬間

花火は
もう飛んでいる。

一瞬で壊された 隕石

花火は
もう飛んでいる。

全て吹き飛ばした 隕石
どうすることも出来なかつた
土に埋もれるしかなかつた

花火は
筒を抜け出る。
初めて そして
たつた一度だけ。

空の高みで
もうひとつ自分の自分に
変わる。

僕はまだ見つかっていない
再び光を浴びたい
誰かに見つかり 展示される日を夢見て
僕はまで 眠っている
誰にも見つかることなく 眠っている

花火は
筒を抜け出る。
初めて そして
たつた一度だけ。

ありの理想

幡山中学校一年

安川 粋吹希

今日もまた働いて
仲間と一緒に巣で寝る毎日
とてもとてもつまらない
飛んでみたい
まるで鳥のように

今日も食べ物を巣に運んで
仲間と一緒に寝て
自分は
どこか遠くに移動して
新たな景色を見てみたい

今日も仲間と働いて
仲間と一緒に目を閉じる
今日もいつも通り
と思つたら
道に迷つてしまつた
自分は自由だ
今日から

『一般の部』

『海峡』 飛行機、海峡など比喩を使って人生の機敏をうまくまとめています。窓から投げ捨てたものたちを取り戻してももう大丈夫と海峡（経験）で学んだからですね。

『明石まで』 きみは遅れてやつて来て わたしは早めに……のリフレーンが何か訳ありかと想像を沸き立たせます。明石までの間詩情を感じます。

『ゆっちゃん』 幼児の様子、心境などよく描けています。『思い出の定期便』 多少難ありますが、括弧内の相の手がおもしろい。詩には多少のユーモアも必要です。『半透明』不確かなる存在、それはたしかに半透明な愛か、それとも。もう少し推考するともつといい作品になりそう。あと「蟻と林檎」「映画」「幻影」など注目しました。

今回も力作ぞろいでした。が、説明や供述のみに終わってしまった作品もありそれは少し残念でした。

『小中学生の部』

『帰り道』 一人で路地を帰る心細さがわかります。カラスは不吉な鳥で怖さを、猫は自分と重ね合わせたりして。路地を抜けるまでの心理を丁寧に描いています。

『青空』 空と雲の作品が多かつたけど、この作品は独自性があります。雲が海の上を歩いているという発想、又最後の一行私は小さい青空を食べたと言う比喩が詩になります。

入選では「僕はまだ見つかっていない」「充電コード」などその物になりきって書いています。「空の祭り」空でもうひとつ自分の自分に変わる「獲物と捕食者」という思考「ありの理想」道に迷ってしまったので今日から自由だ。など佳作に選んだいいと思った所を書き出してみました。